

海・川・湖——その世界とのふれあい

マハンスノー

MARINE SNOW

青森県営浅虫水族館

No.3

1985.12.20

目 次

皇太子さまご夫妻をお迎えて… 1	トビックス…………… 6
スルメイカの採集と輸送…… 2	「かいよう」乗船記…………… 7
イトウについて…………… 3	催し物…………… 7
浅虫の海の生物たち(3)…… 4	浅虫水族館日誌抄録…………… 8
まだまだ赤ちゃん…………… 5	動物紳士録…………… 9
イルカの健康診断…………… 5	

皇太子さまご夫妻をお迎えして

館長 伊藤 進

第21回献血運動推進全国大会ご出席のため、ご来県になった皇太子さまご夫妻が、今年7月16日に当館にもお立ち寄りになりました。

坂本国男企業局長のご先導で、私と桜井泰憲技師が約50分にわたって館内の展示物をご説明申しあげました。初めは兩名とも大変緊張しておりましたが、両殿下の穏やかな思いやりのあるお人柄に引き込まれて、楽しく、無事に大役を果たすことができました。



——大海洋水槽前で——

皇太子さまは大変真摯に、私の説明に耳を傾けられると共に、数々のご質問をされました。また、その間にもお気づきになりました点などを、妃殿下と私に対して、極く自然にまた優しく説明して下さいました。ご専門のハゼについては勿論のこと、その他魚類学全般についても極めてご造詣が深いことに改めて驚きました。

殿下が特に関心をお寄せになりましたのは、青森県地方の魚類のことであった様に思われます。スルメイカの特別展示水槽、浅虫の磯の生物、青森県特別コーナー、それに桜井技師がご説明申しあげた寒帯水槽では、特に細かいご観察をされ矢継ぎ早やにご質問がありました。青森県淡水魚コーナーでも、種類毎に名前と実物をご確認になると共に、魚たちの泳ぐ姿を楽しんでおられる様子でした。なおこのコーナーには、青森県に分

布する淡水～汽水区産のハゼ類を特に集めて展示したのですが、チチブとヌマチチブの見分け方について、殿下から細かいご説明を頂いたことが特に印象に残っております。



——タッチングコーナーで子供達のお相手を——

タッチングコーナーでは、浅虫小学校一年生のよい子供が参加してお迎えしました。両殿下とも大変お気に召したご様子で、子供達が水槽の中から次々と持ち出してくるホタテガイやウニなどを、その都度お手に受けられて、何ごとか子供達と楽しげにお話し合いになっておられました。何しろ子供達が22名も参加しておりましたので、予定時間をかなり超過し、まわりを慌てさせる一幕となりました。

また、ピラルクーを展示している水槽の前では、この魚が青森県と姉妹関係にあるブラジルのサンタ・カタリーナ州より寄贈されたことをお話し



——職員一同でお見送り——

しましたところ、殿下から北村知事にお声がかかり、青森とサンタ・カタリーナとのリング談議に花が咲くなど、和気あいあいのうちに予定の時間が過ぎました。

スルメイカの採集と輸送

桜井 泰憲

今年の夏、特別展示として7月中旬より8月末にかけて、約30トン容量の水槽を用いてスルメイカ、*Todarodes pacificus*の展示飼育を試みた。本種は日本列島に

沿って南北に大回遊することが知られ、また速いスピードで遊泳する頭足類でもあるため、その長期飼育は大変難しい種類とされている。水



図1 スルメイカの採集海域

族館の展示例としては、祖一 (1976) の未成体期のもので59日間という記録が最長であり、亜成体から成体期の大型のものでは1~2週間程度とされている。

これは、他の水生生物に比べて飼育条件をかなり厳密に設定する必要があることもさることながら、その採集と輸送方法が確立していないことも大きな要因である。そこで、今回当館で行った採集と輸送方法について、その失敗例も含めて紹介する。

飼育個体の採集は図1に示すように陸奥湾内の浅虫沖合の定置網と、津軽海峡に面した今別町および大畑町沖合で操業するイカ釣漁に依った。6月には、湾内にもスルメイカが来遊し、定置網に乗網した。揚網は薄明時直前でもあり、船上か



図2 定置網によるスルメイカの採集

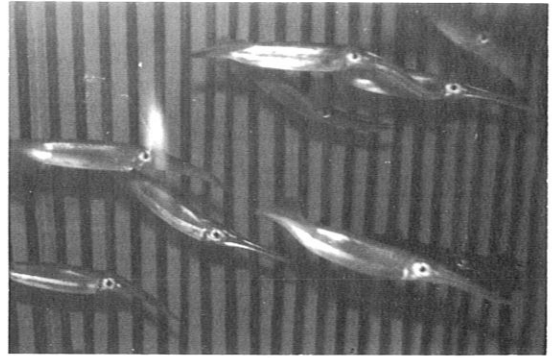


図3 展示中のスルメイカ

ら照明をあけるとイカは表層に浮上し、ビニール製のタモ網で容易にすくい上げることができる (図2)。それらを船上の容器(約300 l)にいったん収容し、海水を流してスミを除去し、直ちにビニール袋に酸素封入して輸送した。同時に、活魚槽(約1トン)に50~100尾のイカを入れて輸送を試みたが、興奮状態となって互いに腕をからめあい、約30分程の輸送途中にすべて死亡した。

7~8月には、湾内での漁獲はなくなり、専ら海峡沿いのイカ夜釣漁となるが、今漁期の漁獲量は例年の1/10と極端に悪く、8月には海の表面水温が25~26°Cまで上昇し、飼育用スルメイカの採集には最悪の状態であった。釣り船には、いけすが備えられており、夜間釣獲したものを収容しておき、港に入った段階で前述した酸素封入法により1尾づつ袋づめし、更に黒いポリ袋で覆い、外からの刺激を軽減させた。ビニール袋の大きさは、イカの全長より大きめが良く、大型個体では輸送途中に袋に吸盤で密着したまま死亡した。

水族館までの輸送時間は2~4時間であり、トラックのFRP活魚槽に氷を入れ、15~18°Cに保冷し、その中に梱包した袋を収容した。7月中はこの方法による死亡は少なかったが、8月には採集時のイカの状態が悪く、輸送途中で死亡することが多かった。また、陸送途中で悪路のためにショックがあったりすると、たちどころにスミをはき出し死亡してしまうこともあった。本種の採集から輸送については、まだ改善の余地があると思われる。

参考文献

祖一誠 (1976) 日動水誌、13 (4) : 79-82.

イトウについて

直江春三

当館の青森県淡水魚コーナーには、イトウ *Hucho perryi* を飼育展示しており、来館者は「おっ、これがイトウか！」と一度は足を止め、のぞきこむようです。イトウは、私達の一般的知識として、

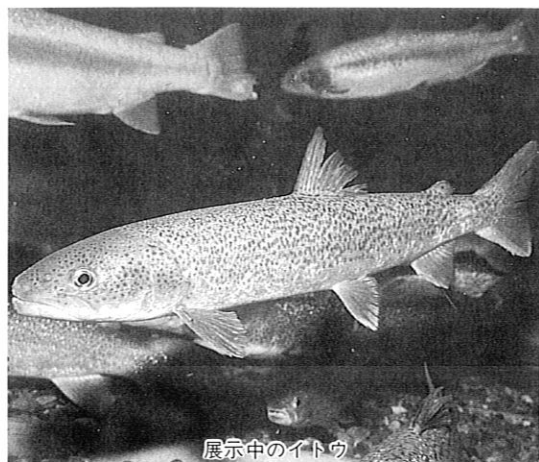
- 1) 淡水魚の中でも最大級——全長1.5mに達するほどの大魚になるサケ・マスの仲間。
- 2) ネズミや蛇、水鳥まで捕食するどう猛な奴。
- 3) かつては小川原湖など青森県にも生息していたが、現在本州では絶滅し、北海道、樺太の河川湖沼にしかいない。最近は少なくなり釣人仲間では“幻の魚”呼ばわりされ、ロマンを感じさせる。

というイメージなのですが、このイトウについて補足説明してみたいと思います。

1. イトウはどの位まで大きくなるのか。正確な測定記録はあまりないようですが、昭和13年頃十勝川の河口で全長2.1mという超大物がサケ網に入ったという話があり、1.5m級のもの最近では稀の稀らしく、恐らく年令30歳に近い老年魚と推定されます。天然魚では大体1年で10cm、3年で20cm、5年で32cm、10年で63cm、15年で1m位といわれています。当館のイトウは4年半で約50cmに育っており、天然より2～3年早く成長しているようです。親になる年令はオスで満6～7年、メスで8～9年といわれますが、人工飼育ではこれより2年位早く成熟するといえます。産卵期は4～5月といわれるので、後1～2年で産卵行動が見られるかもしれません。イトウはサケ・マスのように1回の産卵で死ぬことはなく、条件が良ければニジマスなどのように毎年産卵するようです。

2. イトウはネズミや蛇を食べるどう猛な魚といわれ、小川原湖でも明治の頃は年に1,000kgも捕れた記録があり、「川トロ」と呼ばれるほど美味な魚でありながら、前記のような風評から価格が安かったようです。実際には腹中からネズミなどが

出たことは殆どなかったようです。イトウは強くて大きな^{りょうがく}両顎と小さな鋭い歯を多数もっており、顔つきもちよっときついです。が、「^{イトウ}鮠」という程のものではありません。飼ってみるとむしろおとなしい可愛い奴という感じです。天然では体長15cm



位までは水生昆虫の幼虫を食べ、次第に小さな魚類も捕食するようになり、30cm以上に成長するとドジョウ、スナヤツメ、トゲウオ、ウグイなどの小魚を食べ、稀にカエルも食するようです。ネズミや蛇はほんの稀な例でしょう。当館では主にイカナゴ（コウナゴの10cm位のもの）の切身を与えています。よくとびついて食べます。

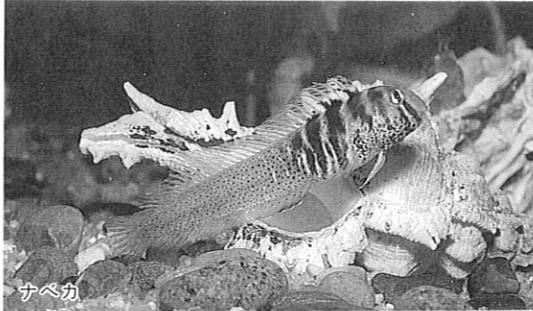
3. 最後に当館に入ってきたイトウの経歴についてつけ加えます。

このイトウは、昭和56年6月北大水産学部久保達郎教授の御好意により、七飯養魚実習場から発眼卵で4,500粒が青森県内水面試験場（十和田市）に贈られたもので、この親は北海道教育大の山代昭三氏が天然魚を採捕飼育して日本で初めて人工採卵に成功した卵を、久保達郎教授がふ化飼育して12年目の春に採卵した2代目のものです。青森県内水試でこの受精卵をふ化飼育し、翌年の4月には全長約11cm、2年後の昭和58年5月には約25cmに成長したものを当館に譲っていただきました。現在、水温8～10°Cで飼育していますが、今まで1尾も死なず、管理さえ充分気をつければ、割と丈夫な魚のように思われます。このイトウがどの位まで大きくなり、何年生きて産卵してくれるか楽しみに育ててみたいと思っております。

～浅虫の海の生物たち～

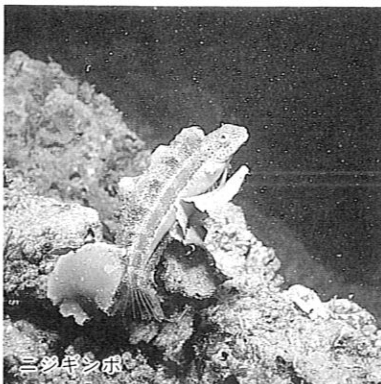
(3) イソギンポ科の魚たち

イソギンポ科 Blenniidaeの仲間は、主に温帯～熱帯地域にかけて生息している小型の魚で、世界中で約300種が報告されています⁽¹⁾。本県沿岸では



イソギンポ *Pictiblennius yatabei*、ナベカ *Omobranchius elegans*、ニジギンポ *Petrosciartes breviceps*の3種が報告されており、そのすべてを夏から秋にかけて浅虫の磯でも見ることができます。

3種とも、体は細長く、成長しても全長10cm程で、茶色の体に褐色のまだら模様がイソギンポ、黄色の体で前半分に黒いシマのあるのがナベカ、茶色の体に吻端から尾にかけて黒い帯のあるのがニジギンポです。それぞれ、口には発達した鋭い



犬歯がありうっかり手でつかむと、噛まれて血がにじむことがあります。

イソギンポとナベカは、岸近くのイガイなどがたくさん

付着する岩や海藻に付く小さな動物達をついばんでいます。たえずまわりを気にして、目をクリクリと動かしているのがわかります。そして危険を感じると、すばやく岩のすき間や貝殻に身を隠します。

ニジギンポは、前記2種とは違い、海底にいることは少なく、稀に流れ藻や、木片、ロープ等に

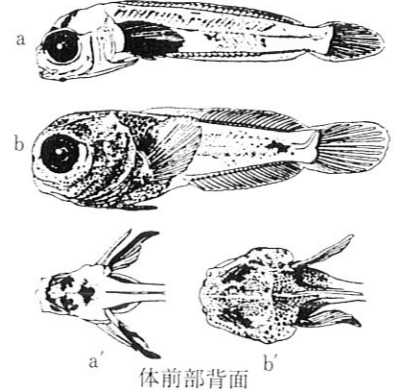
寄りそうようにしているのが見られます。

3種とも、初夏から秋にかけて巻貝などの殻の内側に産卵しますが、最近は海底の空カンなども利用しているようです。卵は橙色～赤色をした美



しいもので、オスは胸鰭で新鮮な水をたえず送ったり、外敵を追いはらったり、ふ化まで卵を一生懸命保護します。生まれた仔稚魚は、初め水面で浮遊生活を送り、浮力を増やすため、頭が大きくなったり(ニジギンポ、イソギンポ)、鰓蓋の角に一对の大きな棘が発達し(ナベカ)、さしずめ鬼っ子という所です。そして2cm位になると親と同じような色や型となり、潮だまりや流れ藻について現われるようになります。

岩のすき間をたくみに逃げ回りますが、慣れば採集も簡単で水槽内でも動物質の餌を良く食べ、飼いやすい仲間です。



ナベカ(a, a'), ニジギンポ(b, b')の稚魚(内田, 1937)

飾りの貝殻や、塩化ビニールのパイプにもよく入りますが、その入り方が少し面白く、細長い体の尾の方からスルスルと穴に入り、顔だけを出すという方法です。チョココンと顔を穴からのぞかせている姿は、とても可愛いものです。(新野大)

参考文献

- (1) Nelson (1984) Fishes of the World : 349.
- (2) 塩垣優 (1982) 青水試報 : 1-72.
- (3) 内田恵太郎 (1937) 科学, 7 (14) : 591-595.

まだまだ赤ちゃん？

1984年の春に保護されたクラカケアザラシたちは、当時いずれも生後1ヶ月未満と推定され、母親と離れ離れになる寸前までおっぱいを飲んでいたので思われます。

水族館では、仮の飼育場として、餌料や展示生物を搬入する際のトラック搬入口に角型の水槽を並べ、その中に幼獣を一頭づつ入れて飼育しました。6頭もの幼獣が集まると、とてもにぎやかで、空腹になると盛んに鳴いて餌をねだり、まるで幼稚園のようでした。

観察していると、時々「チュッ、チュッ……」と何かを吸うような音があちこちからきこえてきます。見ると、何頭かのアザラシが水槽のヘリなどをまるでおっぱいを飲むように吸っているのです。お母さんがなつかしいのでしょうか。一生懸命夢中になって吸っています。こういった行動は1～2ヶ月もすると見られなくなりましたが、一

頭だけいまだに行っている個体があります。6頭のうち、一番最後に保護された雌の「ミ



扉に吸い着いている様子

ミ」です。この個体だけは、保護時に産毛の換毛がまったく始まっておらず、他の個体よりも後に生れたものと推定されました。母親と一緒にいた期間も短かったのでしょうか。保護時12kgしかなかった体重が翌年の夏には50kg以上に成長しましたが、今でも時々展示室の壁や扉を相手に一生懸命「チュッ、チュッ……」と吸っています。口元がさみしいのでしょうか。時々周りを気にしながらも離れようとしません。こんな子、どこにでも一人くらいは、いるようです。（阿部恵一）

イルカ健康診断

現在、バンドウイルカ7頭、ネズミイルカ3頭を飼育しており、その健康管理には、毎日の行動や体表、排便などのチェックのほか、2ヶ月に一度、全個体の定期検査を行います。

検査はプールの水を落水して、一頭づつ捉えてタンカに乗せたまま体重を測り、ステージの上に保定します。その状態で尾鰭の太い血管から血液をとり、肝機能など人間と同じ項目について検査をします。その結果から、風邪をひいていないか、内臓に悪い所がないかなどを調べます。次は体温の測定です。これは人間のように脇の下や口の中で正確に測ることができないので、肛門から体内にセンサーを入れ、直腸内の温度を測ります。正常な個体の体温は、人間と同じで36～37℃位あります。最後に体長、尾鰭の幅、胸囲を測定し、順調に成長しているかどうかを調べます。

これらの結果、体重の減っているイルカは餌の量を増やしたり栄養剤などを与え、また病気のイルカには

必要な薬品を与え、健康に過ごせるようにしています。

この検査でたいへん苦労



バンドウイルカの採血

することは、体が大きく力のあるバンドウイルカは、ちょっとでも気を抜くと、採血中の注射器をとぼしたり、係員3人位でさえ軽く飛ばしてしまうことがあります。そのため、イルカや係員がケガなどしないように保定には大変気を使います。

定期的な健康診断のほかに、摂餌状態が悪くなったり、元気がなくなったりした時には、臨時的に検査を行うこともあります。これらの健康診断によって、いつも最高のコンディションで、観客の皆さんに、イルカ達のすばらしいジャンプを見ていただくことができるのです。（工藤秀仁）

トピックス

ガスキン博士来館！

今年の5月20日に、“The Ecology of Whales and Dolphins. (鯨とイルカの生態)”の著者であるD・E・ガスキン博士が来館されました。

ガスキン博士は、ネズミイルカの調査のため、当館で飼育中のネズミイルカ3頭と、標本として保管している頭骨の測定を行なわれました。

飼育中のネズミイルカを測定している時の博士の態度から、動物をこよなく愛される気持ちが私達にもはっきりと伝わってきました。作業が終わってから、博士に講演していただきましたが、ネズミイルカだけでなく、イルカ全般にわたって色々

と、教えていただきました。博士は、当館以外でも北海道や東京で調査され、日本を6月



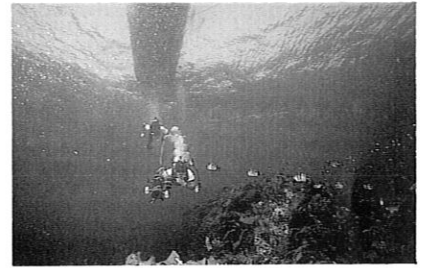
中旬頃に離れられたようです。カナダに帰国されてからもネズミイルカをはじめとする海獣類の論文を郵送していただきました。博士の今後の御研究が、増々発展されることをお祈りしています。

(古賀隆弘)

久六島調査同行記

久六島は青森県深浦町の沖約30kmに浮かぶ島です。今回8月31日に久六島のTV取材に同行することになり、その海中の一部を垣間見ることができました。この時期は対島暖流の真ただ中にあるため、水温は27°C、透明度も30mはあり、北の海とは、信じられないほどの美しさです。海底はツルアラメに覆われて起伏に富み、そのシルエットはさながら山水画のようです。岩の表面や割れ目には、こぶし大のサザエや殻長15~20cmのアワビがいたる所に見られます。また潮あたりの良い岩の側面にはオウギウミヒドラやムツサンゴなど

の腔腸動物が付着しています。魚類はイシダイ、ホンベラ、オキタナゴ、スズメダイなどが群れをなして泳ぎ回り、また本県沿岸ではめったに見られないササノハベラやオヤビッチャなど暖海性の魚が多く見られます。今回は30分余りの潜水で十分な調査はできませんでしたが、機会があればじっくりと潜ってみたいと思っています。



(杉本 匡)

ブームの忘れ形見

現在、水族館の私の机の上には小さな水槽が1個置いてあります。その中には、北アメリカ大陸原産の「オビタイガーサラマンダー」というイモリの仲間が入っています。

実はこれ、今年の夏に青森県内の魚屋さんなどで売られた「ウーパー・ルーパー」の成れの果てなのです。まだブームだった頃に売られた、この「ウーパー・ルーパー」君、実はニセモノで、買った時にはまだ頭のうしろの方にヒラヒラしたエラを持っていたのが、しばらくして、そのエラもなくなり、体の模様も以前とは全く違ったものに

なってしまいました。つまり変態したのです。変態後は、水から上がり陸上生活をします。そういうことを知らずに買った人が、驚いて水族館に持ち込んだという次第です。これが売られ始めてから、水族館には電話で「ウーパー・ルーパーを買って来たけど、どうやって飼えばいいか？エサは？」という問い合わせが相次ぎました。

今、彼等はどうしているのか、恐らく……。ひとつの命です。安易な考えで買わない様に、また売らない様

にお願い致します。



変態したニセの「ウーパー・ルーパー」君
(黒地に黄色のまだら模様)

深海調査船「かいよう」乗船記

9月21日から25日にかけて、日本では深海調査の最先端に行く海洋科学技術センターの調査船「かいよう」に乗船する機会を得ました。今回の調査は、青森県水産部が下北太平洋側の水深500~1000mの小川原海底谷と、その周辺に生息する深海底生物の分布状況を、水中TVカメラで捉えることを目的として行われました。

水深1000mといえば、水温は1年を通して2~5℃、水圧は100気圧、溶存酸素量も極端に少ない暗黒の厳しい世界です。船上のモニターTVに映し出されたその世界の中には、表層から降下するマリンスノーが猛烈に降り注ぐ光景や、雪がや

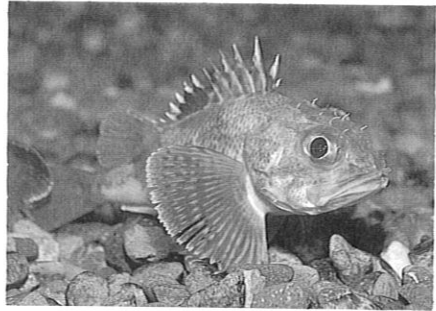


深海調査船「かいよう」

んだ平原のようにしんとした場所もありました。

現在飼育展示が2年目に入ったキチジも海底に

1尾ずつポツンと静止しており、メスケの仲間オオサガは威風堂々と深紅の体を



展示中のキチジ

みせ、深海のウナギ・イラコアナゴがまるでガーデン・イールのようにあたまを海底から出している光景や、ヤナギダコが脚をそろえて麻のように滑空する様子、さらにクモヒトデが5本の腕を巧みに動かして泳ぐ姿にも出くわしました。

水深1000mの小川原海底谷にも確実に生物が息づいていました。深海魚の飼育は難しいとされていますが、その生物たちの生きている姿やその習性を、水族館でも再現できるように努力してゆくつもりです。

(桜井)

催し物

夏の特別展

「磯の生物たち」について

小・中学校の夏休みを中心とした7月10日から9月30日までの期間、「磯の生物たち」と題した特別展示を行いました。これは、海水浴や魚釣りでなじみの深い磯をクローズアップし、その環境とそこに棲むさまざまな生物を、多くの人たちに知ってもらおうと企画したものです。

私達飼育員は、5月末から展示内容の検討を重ね、6月中旬から本格的な採集作業に入りました。潮汐表とにらめっこをしながら、採集を繰り返しましたが、思ったように生物が集まらないこともありました。また、水槽内では通常の行動や習性を示さなくなる生物や石の陰にかくれてしまう生物もあり、生物の追加や交換を頻繁に行いました。

以上のようなありさまでしたが、期間中に採

集・飼育した生物は、無脊椎動物を主として74種にのぼり、これらの生物について得られた知識や経験は、今後の飼育業務に大いに役立つものと思います。最後に、今回の特別展を無事に終えられたことは、東北大学浅虫臨海実験所の方々をはじめ、多くの方々の御協力によるものと感謝いたします。

(原田洵治)



南極展—氷の下の世界

今回、国立極地研究所の全面的な協力を得て「南極展」を開催しました。場所は、入口すぐ左手のレクチャーホール（約60㎡）を使用し、期間は7月20日から10月31日までの104日間でした。

今回は、特に南極の氷の下の海に棲む生物に的をしぼって、極地研究所で管理している数多くの資料の中から、ごく一部をお借りしました。

主な内容を紹介しますと、南極大陸や南極観測に関する説明パネル、海底の環境と生物相に関する海中写真、ナンキョクオキアミ、コオリウオ、ショウワギス、ヒトデ、ウニ、一列の吸盤を持つ

タコなどの液浸標本、地衣類と海藻の乾燥標本などで、他に「南極海の海底生物」のビデオ放映と南極観測隊が持ち帰った「南極の氷」の展示（8月1日より）も行いました。

この特別展を終了して間もなく、11月15日に第27次南極観測隊が日本を出発しました。

（横山勝幸）



浅虫水族館日誌抄録

- | | | | |
|------|--------------------------------------|------|---|
| 4・3 | 八戸よりクラカケアザラシ1歳獣搬入 | 30) | |
| 4・13 | 白尻よりネズミイルカ3頭搬入 | 7・12 | ウミガメ類を計測後、表の池に展示 |
| 4・20 | 春の特別展「ふるさとの淡水生物たち」開催（～6・30） | 7・12 | 鴨川シーワールドにヒダベリイソギンチャク搬出 |
| 4・23 | 大畑町よりゴマフアザラシ幼獣を保護・搬入 | 7・13 | スルメイカの特別展示開始（～8・30） |
| 4・26 | 油壺マリンパークにマダラ5尾搬出 | 7・16 | 皇太子殿下・妃殿下御来館 |
| 5・1 | 青森テレビ「朝のホットライン」にてサケビクニンの摂餌習性・全国放映 | 7・20 | 「南極展・氷の下の世界」開催（～10・31） |
| 5・10 | 白尻よりクラカケアザラシ幼獣を保護・搬入 | 7・27 | 青森テレビ「朝のホットライン」にてスルメイカ全国放映 |
| 5・10 | 関東・東北ブロック園館長会議（埼玉こども自然公園）出席（阿部・代理） | 8・5 | 北大・水産学部調査船「うしお丸」の陸奥湾調査に便乗し、アカエイ他採集 |
| 5・11 | 大畑・佐藤氏よりオオカミウオ1尾寄贈 | 8・31 | 青森テレビ・特別番組「久六島を探る」（9・22放映）の現地取材に同行（桜井・杉本） |
| 5・20 | カナダ、Guelph大学ガスキン博士・ネズミイルカの調査のため来館・講演 | 9・1 | ネズミイルカ3頭展示開始（～10・5） |
| 5・29 | 日動水通常総会と協議会（福岡市）出席（伊藤館長） | 9・14 | 国立養殖研究所よりベステル3尾搬入 |
| 6・10 | 入館100万人目のためのセレモニー | 9・15 | いなわしろ淡水魚館よりアユ他搬入、イトウ6尾搬出 |
| 6・19 | 室蘭水族館にマダイ30尾搬出 | 9・21 | 海洋科学技術センター調査船「かいよう」による下北太平洋側深海調査に参加（桜井） |
| 6・29 | ブラジル、サンタ・カタリーナ州知事来館 | 9・26 | 志摩マリンランドよりイトヒキアジ他搬入 |
| 7・2 | 江の島水族館よりイザリウオ他搬入。当館よりオオカミウオ他搬出 | | |
| 7・10 | 夏の特別展「磯の生物たち」開催（～9・ | | |

※No.2（6月20日発行）の表紙の魚種名「イボダンゴ」を「ナメダンゴ」に訂正いたします。

浅虫水族館 動物紳士録



オタリア

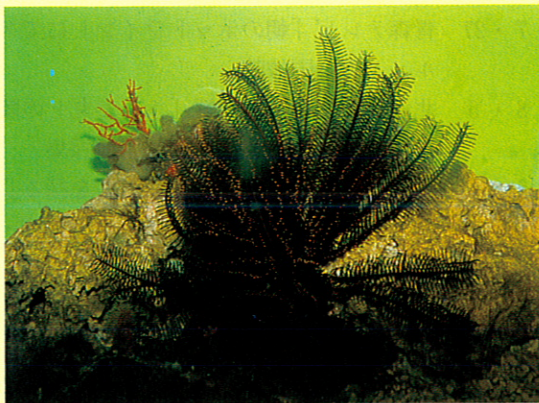
Otaria flavescens, (Shaw)

南米のチリーやペルーの沿岸に生息しているアシカの仲間です。成長した雄は「たてがみ」がとても立派で、英名の「シーライオン」の名にふさわしい容姿になります。当館では、雌を2頭飼育しており、カリフォルニアアシカと共にショーを行っております。日中は、時々飼育舎の中でケンカしているようですが、夜になると体を寄せあって仲良く寝ており、ほほえましい思いがします。

キヌバリ

Pterogobius elapoides (Günther)

ハゼの仲間では大変美しい魚で、岸近くの岩場や藻場にすんでいます。青森では、主に日本海側で6月頃から見られます。幼魚の頃は群れていますが、成長すると全長10cmぐらいになり、単独で生活をします。キヌバリとは、美しい絹布を張ったような魚〈絹張り〉という意味だそうです。寿命は短く、1～2年位です。やはり、「美人薄命」ということでしょうか。



ニッポンウミシダ

Comanthus japonica (J.Müller)

この、植物のような「姿」と「名前」をもつ生物が、ウニやナマコの親せきだと知ったら、驚く人も多いでしょう。ウミシダ類は、古生代に栄えたウミユリ類から進化したとされる、原始的な棘皮動物です。この種類は、暖い海の岩礁に多く、主にプランクトンを食べて生活していますが、深海にすむ種類では、マリンスノーが主食だともいわれています。

表紙説明・ネズミルカ

4月13日に北海道、白尻より搬入しました。9月には、夏の間日光浴のため屋外プールに移したウミガメの水槽を利用して特別展示を行いました。夕方には係員が水中給餌も行い好評を博しました。

マリンスノー No.3

1985年12月20日発行

編集兼発行人

(財)青森県企業公社

青森県営浅虫水族館

〒039-34 青森市浅虫字馬場山1の25

TEL 0177-52-3377